

郷音

~ KOURU ~

流



写真：ひたちなか市 光泉寺 大内光

© Ffkaru

共感

土浦桜堤の並木道は明治43年に沢田桑蔵氏が桜を寄進したことに始まり、現在では花見の季節になると約4キロに渡る500本のソメイヨシノが咲き誇る。

行き交う人の人生はそれぞれでありながら、老若男女問わずに、一様に桜を眺め「きれい」とつぶやく。そして、そのきれいという言葉に「そうだね」と応える。そこには年齢や性別を超えた「共感」がありその共感がまた人の心をほっとさせるのだろう。

新型コロナウイルス感染症流行の中、犯人捜しをするのではなく、「つらいよね」「大丈夫」という優しい言葉が恋しくなる。責め合うところではなく、許し合うところ、励まし合うところを大切にしていきたい。

ひたちなか市 清心寺 増田廣樹

ひと



金砂郷おむすびの会 × 常陸太田市 正念寺 坊守

佐竹 和子さん

©Fikaru

本とひとをむすぶ

「おとととと。あー……」 『じいぐのそとべん』
まるで落語のような臨場感のある声が本堂中に響き渡る。

今回は、常陸太田市を中心に読み聞かせ活動を行っている「金砂郷おむすびの会」所属、元幼稚園教諭の佐竹和子さん（正念寺坊守）にお話を伺いました。

——読み聞かせ活動とはなんですか？

様々な絵本の中から吟味したものを、しっかりと練習したうえで実演し、楽しい時間を過ごしてもらおう活動です。本って面白いなーと思ってもらえたり、言葉の楽しさや美しさ、絵本に描かれる心も共有できたらと思っています。

——いつからこの活動をされているのですか？

旧金砂郷町で本の朗読や選び方の勉強会があり、それが平成10年に読み聞かせサークル「おむすびの会」となりました。現在は毎月、保育園や幼稚園、小学校、福祉施設などで朗読を行っています。多い時は100人くらいの人の前で朗読するので襖サイズの紙芝居を描いたりしますし臨場感を出すためにBGMを作成したりもしています。

——おむすびの会……おにぎりみたいですね(笑)

本と子ども、本と私、様々なものが結び付いていくことから「むすぶ」という名称ができました。また読み手一人一人の個性がおにぎりの具のように様々な味をもたらすことも意味しているんです。

なので一人一人が無理をすることなく、本と人の出会いを育み、楽しく活動することをモットーにしています。

最初に指導をして頂いた先生(元ラジオ茨城放送)からは、「自分の好きな絵本を読む」ことを勧められました。自分が「いいな」と思う本が一番心をもって朗読することができまね。読み聞かせしている私自身が一番楽しめているかもしれません。

——何事もやっている自分が「楽しい」と思えることが大切かもしれませんね。読み聞かせのやりがいはいどんな所でしょうか？

聞き手の反応にやりがいを感じますね。読み方、間の取り方はもちろんのこと、本のめくり方一つとっても、次のページの文章を覚えて、読みながらめくるなど工夫する事で、同じ絵本でも全く違う印象の物語になるんです。

子供は正直ですからね、つまらない時、難しい時は、興味をもってもらえなくなります。だからこそしっかりと練習を重ねることが大切だと思います。

——(下読みの台本を見せていただいて)すごい。まるでドラマの台本みたい。こんなに練習をされるんですね。まさに好きこそもの上手なれですね。



Profile

佐竹 和子

趣味・特技: 読書・歌

好きなもの: 空・音

座右の銘: ケセラセラ

読み聞かせを通して何か気づかされたことはありますか？

時代の変化です。昔の絵本を読むと今の子どもには分からない単語が出てきたりします。置いてきぼりにしたくないという想いと、その言葉を教えたいという想いと葛藤しますね。

他にも家族に対する受け止めの変化を感じます。昔の本は父や母が良い人として描かれますが、現代は必ずしもそうではないので、逆に苦しめてしまう可能性もありますからね。

です。最近の絵本はどちらかと言うと物語ではなく、自分(子供たち)の気持ちを代弁してくれる本が多いと思います。弟妹ばかり優先されて我慢を強いられるお兄ちゃんお姉ちゃんの心情を描いた本、怒られてばかりの子の心の中を描いた本、そういう「心」を描く本が多いですね。

——「あ、これ私のことだ」となれる本に出合えると心が軽くなりますもんね。最後に一言お願いします。最近では、桃太郎や浦島太郎の目線になって物語を追体験できる作品なんかも出ています。「本当は鬼退治なんて行きたくないんだ」そんな一面も見られるので面白いですよ。

取材が終わった後も、たくさん作品を紹介してくださる佐竹さん。心から読み聞かせを楽しんでおられるのだなと思われました。

帰り際に一冊の本を頂いた。高学年の子には必ず読

むおススメの一冊とのこと。

『二番目の悪者(小さい書房)』

動物の国での出来事。誰かにとって都合の良い嘘が噂となって広がっていく。真実が捻じ曲げられて伝わっていく。事実を確認せず広げた噂が噂を呼び最終的に国を滅ぼしてしまう。嘘をついた者も噂を広げた者も住処を失い残されたのは広い荒野のみ。果たして嘘をついた者だけが悪かったのだろうか…。

CMにもなった作家の小泉吉宏さんの『一秒の言葉』という言葉を思い出す。

「はじめまして」「この一秒ほどの短い言葉に、一生のときめきを感じることもある

「ありがとう」「この一秒ほどの短い言葉に、人の優しさを知ることがある

「がんばって」「この一秒ほどの短い言葉で、勇気がよみがえってくることもある

「おめでとう」「この一秒ほどの短い言葉で、しあわせにあふれることがある

「ごめんなさい」「この一秒ほどの短い言葉に、人の弱さを見ることがある

「さようなら」「この一秒ほどの短い言葉が、一生の別れになる時がある

一秒に喜び 一秒に泣く 一生懸命 一秒

私たちは今日、何を想い何を言葉にしたか。今、如来様が浄土を向いて一緒に生きようと呼びかけてくださる。

令和二年十二月十一日 聞き手: 水戸市 安楽寺 澤田唯

～茨城の念仏道場を尋ねて～

しゅうほうざん じょうこうじ 衆宝山 浄光寺



貞応元年(122年)創建
常陸御坊と呼ばれる

ひたちなか市館山には、高さ20メートルほどの台地に、本願寺派の寺院が七ヶ寺密集している。館山の台地を車で登ると、右手にひと際目を引く荘厳な山門が現れる。浄光寺の山門だ。山門をくぐると、正面に第二次大戦後すぐに建て直された、重厚な造りの本堂が見える。本堂やその周囲に繁茂する巨木一本一本が、浄光寺の歴史の深さを物語っているように思う。

浄光寺は、親鸞聖人の高弟「二十四輩」の一人、唯仏房創建の寺である。始め枝川の地(現在のひたちなか市)にあった草庵は、一度水戸城内に移転し、後の元禄9年(1696年)に館山の地に本堂を移し現在に至る。以来300年に渡り浄光寺はご門徒と共に歴史を紡いできた。

また浄光寺には、しだれ桜の木があり春になるとそのしだれ桜の花が咲き乱れる。夜はライトアップもされ、地域の方々も訪れている。

喫茶店から寺の住職に

「たくさんさんの良いご縁があって、お寺の養子に入れたことは良かったと思っています。」「そう穏やかに語るのは、浄光寺第30代枝川重樹住職。

住職になる前は水戸駅の近くで喫茶店を営んでいた。住職は今から33年前、結婚をご縁に浄光寺に入寺した。「まさかお寺の住職になるなんて思いませんでしたよ」と住職は笑う。

ひたちなかユネスコ協会の会長でもある住職は、海外に向けた活動にも取り組んでいる。ネパールに新しい学校を



建てるための活動や、お金がなく学校に通えない学生の支援などを行ってきた。このような活動がネパール政府に表彰されたこともある。住職という一つの型に収まることのない、多彩な経歴を持つ住職だ。

ご門徒とは、お友達の関係でいたい

「私はお寺に養子に入りますから、周りからお寺さんらしくないですねとよく言われるんです。そのうえで、人当たりをととても大事にしてみました。」と住職は語る。浄光寺のある館山周辺の地域は、お寺の住職とご門徒が近所の友達のような関係で成り立っている。ご門徒や地域の方と和気藹々とお寺をやっていききたいという住職の言葉には、驕ることなく謙虚に住職を務めてきた人柄が垣間見える。

最近はお寺離れという言葉もあるが、お寺さんとはつきにくいというイメージをなるべく無くしていきたいとも語る。昨今は新型コロナウイルス感染症の影響で、生活が大変な家庭もある。こんな時代だからこそご門徒に寄り添い歩いていけば、お寺離れはそんなに大変な問題ではないように思うと住職は力を込める。

この度の火災にて無量寿様が甚大な被害にあわれましたこと、謹んでお見舞い申し上げます。御寺族・御門徒様方のご心痛いばかりかと拝察いたします。お念仏の道場としての復興を、衷心より念じております。

茨城東組組長 佐竹知信

茨城東組広報誌『響流』第十一号

二〇二一年三月発行

発行／浄土真宗本願寺派茨城東組

〒三一三〇一二三

常陸太田市久米町二〇一 正念寺内

編集／茨城東組 阿闍世の会